１０月２５日 第一・第三礼拝

「ともにおられる主を礼拝する」

創世記２８章１節～２２節

導入

今日は第二礼拝では親子礼拝の時間が持たれますが、この親子という言葉は不思議な言葉ですね。聞く人によって色々な感情を思い起こさせる言葉だと思います。支配、期待、葛藤、依存、赦し、継承、そして愛。皆さんにとって親子と言う言葉は何を自分の心の中に思い起こさせるでしょうか？

また、この親子については、古今東西、様々な文学においてテーマとされてきました。例えば劇作家シェイクスピアの四大悲劇の一つであるリア王では、傲慢な王である父と、その父を言葉ではなく、行いを持って愛した娘との壮大な親子喧嘩を通して、家族の愛と痛みが語られ、そして、最後には、強く見えたリア王も１人の弱い人間でしかなかったということが分かります。

私はこのリア王とヤコブは似ているところがあると思うのです。何が似ているのか、それは自分の力で自分の人生を支配しようとした人間が、家族との関係が壊れたことによって旅に出ることになり、苦しみを通して、かたくなな心を砕かれ、本当の愛とは何なのかを知るというところです。

けれども、全く違う点として、リア王は旅の中で本当の自分と出会いましたが、ヤコブは旅の中で本当の神様と出会いました。リア王はどこまで行っても、人、人、人、人の物語です。

しかし、ヤコブの旅には神様が人に会いに来られたという、神様の恵みと愛が記されています。今日はこのヤコブとその家族から、神様がともにおられる幸いを見てまいりたいと思います。本日は、はじめにヤコブの家族について確認し、その後、２８章からヤコブとともにおられる神様を見てまいりましょう。

兄弟の確執

今日の聖書箇所にあるヤコブの旅立ちは前途ある有望な若者のサクセスストーリーのような美談ではありません。これは母リベカが双子であるヤコブとエサウを妊娠した時からすでにはじまっていた兄弟喧嘩の果てにある逃亡の旅でした。（創世記２５章２２節）

このヤコブとエサウの対立は聖書には大きく二つのことが記されています。一つは弟ヤコブと兄エサウが長子の権利、つまり、父親の財産や祝福を将来受け継ぐ長男としての権利をパンとレンズ豆の煮物で売り買いしたこと。（創世記２５章２９節～３４節）

もう一つは、エサウに与えられるはずだった父イサクからの祝福をヤコブがだまし取ったことです。ヤコブは毛深かったエサウに変装し、イサクの好むおいしい料理をリベカに作ってもらいそれを食べたイサクはヤコブをエサウと勘違いしてヤコブを祝福したのです。（創世記２７章）

これだけを聞くとヤコブという人は兄の長子の権利も、祝福も奪い取った強欲な人と思われるかもしれません。けれども実はこのヤコブの行動、生き方には母親リベカと父親イサクの影響がありました。親の生き方が子どもに影響を及ぼしていたのです。

親の生き方が子に

では、ヤコブの両親はどのような人たちだったのでしょうか。まず、母リベカからたどってまいりましょう。リベカとは「アブラハムの兄弟ナホルの妻ミルカの子ベトエルの娘」つまり、イサクの親戚です。このリベカは、人に仕える優しさと、神様の導きを信じて一歩踏み出す行動力を持った女性でした。

彼女の姿で最も印象的なのは、イサクの結婚相手を探しに行ったアブラハムのしもべに水を与えただけでなく、しもべの連れて来たらくだ１０頭にも水を汲んであげたことでしょう。（２４章１８節～２０節）優しさと行動力、そして美しさを兼ね備えた女性、それがリベカでありました。

しかし、彼女には痛みが一つありました、それは約２０年間もの間、不妊であったことです。しかし、夫イサクの祈りを主は聞き入れてくださり、リベカは双子を身ごもることになります。そして、リベカはこの双子であるヤコブとエサウが生まれる前に、主からこのようなお告げを頂いていました。

創世記２５章２３節「すると主は彼女に言われた。『二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る。一つの国民は、もう一つの国民より強く、兄が弟に仕える。』」

このように、弟ヤコブの方が兄エサウよりも強い国民の祖先になると、リベカは神様から告げられていたのです。

また、創世記２５章２８節では「イサクはエサウを愛していた。猟の獲物を好んでいたからである。しかし、リベカはヤコブを愛していた。」と父イサクはエサウを、母リベカはヤコブを、夫婦が別々の子どもを、それぞれ愛していたことが記されています。

リベカは神様からのお告げをイサクに伝えなかったのでしょうか、それともイサクはリベカからヤコブの祝福を聞いていたにも関わらず、ヤコブではなくエサウを変わらず長男として愛し続けたのでしょうか。イサクは神様の約束よりも、自分の愛情や判断を優先してしまったのでしょうか。

聖書には詳しく記されていませんが、夫婦のコミュニケーションが上手くいっていなかったことが、ここからは見えてきます。そして、このような夫婦の仲が不安定、子どもへの愛情に偏りがある家庭では、兄弟同士の競争も自然と激しくなったことが想像できます。

また、ヤコブがエサウから父の祝福を奪った時も、リベカによる計画がその背後にはありました。リベカは夫イサクと息子エサウの会話を盗み聞きし、エサウがイサクのために獲物を取り、料理をし、祝福を受ける前に、先にヤコブに子やぎを二匹取って来させ、自分が調理し、ヤコブが毛深いエサウに変装する手助けをし、祝福を奪い取る手はずを整えたのです。（創世記２７章５節～１７節）

さらに、今日の聖書箇所のすぐ前、２７章４６節にある言葉ですが、リベカはエサウがカナンに住むヒッタイト人の女性と結婚したように、ヤコブも聖書の神様ではない偶像を信じる女性と結婚したら「私は何のために生きるのでしょう」とまで言います。

しかし、このリベカの語りはある程度本当のことを言いながらも本心を話してはいません。リベカの本当の思いは、自分の祝福を奪われ怒ったエサウに、愛する息子ヤコブが殺されたくないということでしょう。リベカは家族の中で争うことを避けたのかもしれません。しかし、リベカはここで夫であるイサクに自分の本心を偽ったのです。

リベカは神様に信頼して夫に自分の気持ちを打ち明け、家族の関係の回復を計るよりも、ヤコブを変装させた時と同じく、自分の計画によって神様の祝福がヤコブに臨むようにしました。リベカの生き方には、神様の祝福を自分の力でコントロールしようとする心が見え隠れしています。

また、イサクがどのような男性であったかについてですが、彼は族長たちの中でもあまりページを割いて語られていない人でもあります。聖書に「これはアブラハムの子イサクの歴史である」と書かれていながらも、その書かれている歴史は半分以上ヤコブの歴史です。

また、せっかく掘り当てた井戸も争いを避け譲るという平和と謙虚の人それがヤコブでした。父アブラハムに子どものころ全焼の献げものとして、ささげられそうになるという壮絶な体験を通して、彼の中で何か思うところがあったのかもしれません。

一方、アブラハムが妻サラをエジプトとゲラルで、二回も自分の保身のために妹と偽ったように、イサクもリベカを自分の保身のために妹と偽った時がありました。知ってか知らでか親子で同じことをしているのです。そして、この行動からも分かるように、きよらかな人に見えたイサクの心の奥底にも、リベカと同じく、神様に信頼するよりも、まず自分の計画、考えが先を行くという心の中の隠れた思いがあったのです。

そして、この自分の計画によって神様の祝福をコントールしようとする両親の生き方は、ヤコブにも受け継がれました。ヤコブはこの後、叔父ラバンの下でも、またエサウと再開する前にも、まず自分の力と計画で状況をどうにか打開しようとします。神様がともにおられるにも関わらず、いつも自分の力に頼ろうとするのです。

神様の祝福を一身に受けた家族であるにも関わらず、イサクも、リベカも、エサウも、ヤコブも、まず神様より自分に頼り、真っ先に神様に頼ろうとはしない、このような欠けのある家族から、はじまるのが今日のヤコブの旅立ちなのです。

私事でありますが、私の育った家族もこのように神様よりもまず自分、神様に信頼しようとしない家族でありました。父と母は聖書の神様を知らずに出会い結婚し、姉と私も、父がミッション系の小中高一貫校に入学させてくれるまで、イエス様を知らない家庭で育ちました。

振り返ってみれば私を筆頭に、私の家族も神様よりもまず自分、自分の考え、計画が先行する家族でした。けれども、今日も私が元気にキリスト教の教会で生きていることを見て頂ければ分かるように、私たち家族の状況に関わらず、神様は私たち家族をここまで守り導いて下さいました。

皆さんの育った家庭はどのような家庭だったでしょうか。どんなお父さん、どんなお母さんでしょうか。もうすでにイエス様を知っている家族でしたか、それともまだイエス様を知らない家族でしょうか。

しかし、心配はいりません。どのような家庭、家族であったとしても、詩編１４５編９節に「主はすべてのものにいつくしみ深くそのあわれみは造られたすべてのものの上にあります。」とあるように、神様に造られた私たちは、信仰に入る前も、入った後も、誰もが主の恵みの中で生かされている者であることに変わりはありません。神様のいつくしみとあわれみはすべての家族に注がれているのです。

１節～５節　契約を進める神

同じように創世記２８章の１節～５節には、家族の状況に関係なく、ご自分の恵みの約束を進めていかれる主の御手が見えます。

まず、イサクはヤコブを呼び寄せ、カナン人の女性ではなく、リベカの兄、ヤコブの叔父であるラバンの娘たちから妻を迎えなさいと言います。そして、ヤコブを祝福して送り出します。特に注目したいのは３節～４節の祝福です。これはヤコブがエサウから奪った長子の祝福とは違い（２７章）アブラハム、イサクに与えられた神様からの契約の継承です。

つまり、子孫を増やし、土地を与え、すべての民族を祝福するという、神様による全ての人の救いの約束を受け継ぐ祝福です。理由は書いてないので分かりませんが、イサクはここでようやく、エサウではなくヤコブを神様が選んだ祝福の継承者として認めたわけです。バラバラであった夫婦の意見がここで一致を見るわけです。

そして、なによりもこの契約の継承者がヤコブであることは、神様がリベカに兄が弟に仕えると告げたように神様のご計画でした。人間の色々な計画や家族関係の破れのなかでも神様はご自分の約束を完成させるために、着々とことを進められているのです。

６節～９節 エサウへの約束

さらに、６節～９節を見ると、このことを知ったエサウは、自分が父と母に祝福してもらえないのは、カナン人の女性を妻にしたからだ。それなら自分のおじいさんであるアブラハムの家族から奥さんをもらったら自分も祝福してもらえると思ったようです。

このように、エサウと言う人は、神様の約束である長子の権利を軽んじたことからも分かるように、目の前のことに揺さぶられ、将来与えられる神様の約束よりも、自分の今の思いや感情を優先してしまう人でした。今回も、エサウはなぜかイシュマエルというイサクの異母兄弟の娘、エサウにとっては叔父の娘を妻として迎えました。

しかし、神様が選ばれたのはヤコブです。エサウはお父さんに配慮して、お父さんが喜ぶような親戚から妻を得ましたが、ヤコブを選んだ神様には配慮せず、神様が喜ばれることはなんであるのかということを気にするそぶりも見せません。

エサウは、父イサクを喜ばせる方法は考えましたが、天の父なる神様が喜ぶことは何かを求めようとはしなかったのです。まず神様がどう思われるのかということを考え、伺い、生きる神の民の在り方として深刻なズレがエサウにはあったのです。

けれども、神様は創世記の３６章を見ると、１章全部を使ってエサウのことも、神様がリベカに「二つの国があなたの胎内にあり、二つの国民があなたから分かれ出る」と約束された通り、エドムという一つの国の祖先として祝福して下さったことが分かります。

人には計り知れない神様の約束への誠実さを、私たちはこのエサウからも知ることが出来るのです。人の思いや決意、約束は変わりやすものですが、神様の約束は変わりません。神様はご自分の約束を必ず成し遂げられるお方なのです。

１０節～１２節　神と出会う

そんなエサウをよそに、ヤコブは逃亡の旅を続けます。やがて、ヤコブはある場所にたどりつきました。すでに日も暮れたので、ヤコブはそこで一夜を明かすことにします。そして、そばにあった石を枕にして寝ることにしました。

お坊ちゃん育ちだったヤコブはこの時さぞ心細かったことでしょう。これまでは、何不自由ない暮らしを与えてくれる家族と、暖かい毛布とご飯が、いつもヤコブと、ともにあったはずです。

誰も知らない場所で一人野宿をしようとしているヤコブの恐れや不安は計り知れないものだったでしょう。しかし、ヤコブは一人ではありませんでした。なぜなら、神様がともにおられたからです。

２８章１２節「すると彼は夢を見た。見よ、一つのはしごが地に立てられていた。その上の端は天に届き、見よ、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていた。」

ヤコブはいつの間にか寝入ってしまい、そして夢を見ました。ですが、これはただの夢ではありませんでした。この夢は神様がヤコブと共におられることのしるしでした。神様の方からヤコブに会いに来て下さったのです。

その夢の中で、ヤコブが見ると、一つのはしごが立てられて、その上の端は天にまで届いており、神の使いたちが、そのはしごを上り下りしていました。また、さらによく見ると、そのはしごの上には、なんと主が立っておられヤコブにこう語りかけました。

１３節～１５節　神の約束への誠実さ

２８章１３節～１５節「そして、見よ、主がその上に立って、こう言われた。わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、主である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。あなたの子孫は地のちりのように多くなり、

あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

父イサクから契約を受け継いだヤコブに、神様ご自身がこの契約の成就をヤコブに直接語ってくださいました。

ここで大切なのは、「わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」とあるように、この神様の約束の守りは、ヤコブに理由があるのではなく、契約を守ろうとされる神様の誠実さにあるということです。

つまり、神様は自分の計画によって、無理やり神様の祝福をエサウから奪ったヤコブに対して、神様の約束は神が必ずその通りになさるということを教えて下さったのです。この時、ヤコブは、神様からの直接の語り掛けによって、神様の祝福とは自分で奪い取るものではなく、神様が約束し、神様が与えて下さるものであることを知ったのです。

そして、ヤコブは夢から目を覚ますと、神様ではなく自分の計画を優先し、自分の罪ゆえに逃げ出した先にも、神様がともにおられたことに驚きこう言います。

１６節～１９節　神と出会ったヤコブ

１６節「ヤコブは眠りから覚めて、言った。『まことに主はこの場所におられる。それなのに、私はそれを知らなかった。』」

ヤコブはこれまで神様のことを知らなかったわけではありません。父と母から神様のことは良く聞いていたことでしょう。しかし、ヤコブはここで直接自分に語られた神様と出会い、祖父母と両親の神様が自分と共におられる、自分の神様であることを知ったのです。

父と母がいつも話してくれた神様、話しでは聞いていたけれども、どこか自分とは遠い所にいた神様が、はじめてヤコブ自身の神様となったのです。ここからは信仰や神様のことを伝えるのは親の役目ですが、信仰を受け継がせて下さるのは神様であり、子どもと出会って下さるのも神様であると言うことが分かってきます。私たちは自分が神様と出会わなければ、神を自分の神として信じることは出来ないのです。

その後、ヤコブは自分が枕にした石を取ってそれを記念碑として立て油を注ぎました。そして、この場所をベテル「神の家」と呼び、神様との出会いと、神様の約束を、忘れないように記憶し、神様を礼拝したのです。

冒頭で親の生き方が子どもに影響することを確認しましたが、このヤコブの行動も、知ってか知らでか、親の影響を受けた行動です。

アブラハムもイサクも、困難の後、失敗の後、そして神様が自分に現れて下さった後、節目節目で、必ず祭壇を築き、主の御名を呼び求め、神様を礼拝したのです。子どもは見ていないようであっても親の信仰の姿を見て、その姿に倣っているのです。いい面でも悪い面でも子は親の鏡なのです。

２０節～２２節　ヤコブの誓願

２０節～２２節では、神様の約束の言葉を受け取ったヤコブによる誓願が記されています。しかし、ヤコブはまだ信仰者としての未熟さを残しています。

２８章２１節「無事に父の家に帰らせてくださるなら、主は私の神となり、」と、神様が自分の願いを叶えて下さるなら、主を私の神様と認め、十分の一を必ずささげると、半ばご利益信仰のようなことを言っています。

この後のヤコブの歩みを見ても分かるように、まだまだヤコブにはきよめられなければならないところが沢山ありました。ですが、心配はいりません。ヤコブの長い旅はまだはじまったばかりです。

ここからさらにヤコブは色々な体験を経て、信仰者として成熟していきます。叔父ラバンのところでは騙され一番好きだったラケルの代わりにまずレアと結婚させられ、また、晩年には自分の息子たちに騙され、愛するラケルの子どものヨセフは死んだと思わされました。

ヤコブはこのことをどう捉えたのでしょうか。聖書の教えには因果応報はありませんが、まいた種を刈り取るということはあるのだと思います。過去に父イサクと兄エサウをだました報いを「あぁ、今自分は刈り取っている」ヤコブはそう思っていたかもしれません。

聖書にはヤコブの気持ちは書かれていないので分かりませんが、確かなのは、これらの出来事によってヤコブは生涯を通して、自分ではなく、神様に頼るように変えられていったということです。

その証拠に創世記の 49 章では、ヤコブは自分の息子たちを呼び出し、自分の思いではなく、神のみこころで子どもたちを祝福しました。自分の思いであればどうして、騙されて結婚したレアから生まれた四男のユダから王権が離れないなどと言えるでしょうか。

そして、このユダ族からダビデ、そして真の王である主イエスがお生まれになるのです。ヤコブは自分の思いと計画を超えて、神様の祝福を子どもたちに受け継がせる者へと変えられたのです。

ヤコブの祝福を奪ったゆえに起こった逃亡の旅は、神様と出会ったことによって、神様から祝福を受け取り、その祝福を受け継がせる旅へと変わっていきました。それは決して平たんな道のりではありませんでした。ヤコブ自身が晩年エジプトのファラオの前で言ったように、「いろいろなわざわいが」ヤコブの人生にはありました。しかし、神様はヤコブの逃亡の旅を祝福の旅に、神様に信頼して祝福を受け継がせる旅へと変えて下さったのです。

まとめ

ここまでイサクとリベカという夫婦、そしてヤコブとエサウという兄弟を見てまいりました。この家族から、いろいろなことが適用できるのだと思います。

親御さんたちには、子どもはみな同じように愛することが大切であること、自分の生き方、神様への姿勢が子どもに影響を与えること、両親の不仲は家族を分裂させること、神様に信頼して子どもたちをゆだね祝福すること、

子どもたちには、自分の行動原理が何であるのか、親を喜ばせたいのか、それとも神様を喜ばせたいのかということ、親の神様が、自分の神様と本当になっているのかということ、自分の信仰は神様に何かを叶えてもらうための信仰になっていないかということ、などなど、色々なことが適用として言うことが出来ると思います。

しかし、２８章の中心的メッセージは、神様がヤコブとともにおられ、神様が約束を守られるということです。そして、メッセージの冒頭で言いましたように、神様がヤコブと出会って下さったこと、神様がヤコブに会いに来てくれたこと、これが特別な出来事なのです。

アブラハム、イサクの祝福を継承するヤコブに神様ご自身が天からはしごをかけ、自ら出向かれ語りかけられたのです。神様が会いに来られたのです。これ以上に特別なことこれ以上の恵みがあるでしょうか。この神様との出会いがヤコブの人生を一変させたのです。

冒頭申し上げたリア王のように、人生の荒野の旅路で、自分自身を見出したとしても、神様に見出されなければ、人の最後に待っているのは死だけです。しかし、神様が出会って下さったのであれば、死の先にも永遠に神と、ともに生きるという希望があります。

神と出会い、神がともにおられること、このことを知ったときに人の人生は自分中心から神中心の生き方へと変えられていくのです。そして、今ここまで見てきたヤコブと同じ、いやヤコブ以上のことが私たちの身に起こっています。

神様は昔選ばれた人々に直接語り、そして今は聖書のみことばを通して、すべての人に、そして私たちに語っておられます。ヨハネの福音書１章５１節を共に開きたいと思います。イエス様が弟子のナタナエルに語られた言葉です。

ヨハネの福音書１章５１節「そして言われた。まことに、まことに、あなたがたに言います。天が開けて、神の御使いたちが人の子の上を上り下りするのを、あなたがたは見ることになります。」

これは、旧約聖書の時代に神様がはしごの上からヤコブに会いに来て下さったように、新約聖書の時代には、神のひとり子であるイエス様ご自身が全ての人に会うために天から地上に来てくださったということです。

それだけではありません、このイエス様を通して、アブラハム、イサク、ヤコブに受け継がれた、神様の祝福がこの地上の全ての家族に流れ込んできているのです。

事実、父も母も真の神様を知らない破れのある家庭であった、私と私の家族にもこのイエス様は会いに来て下さいました。自分中心に生きること、それが罪だとも知らない私たち家族にイエス様が会いに来て下さって神様を礼拝するように変えて下さったのです。

アブラハム、イサク、ヤコブの恵みと祝福がキリスト・イエスにあって私たち異邦人の家族にも及んだのです。そして、これは私の家族だけでなく、全ての家族に注がれている恵みと祝福でもあります。主イエス・キリストの愛は、この地上の全ての家族に注がれているのです。主イエス・キリストを信じるなら、私たちは信仰によるアブラハムの子孫であり、神の家族なのです。

この神の家族として、ともに神の恵みと祝福を受け継ぐ者として、私たちはともにおられる神を、これからも、ともに礼拝していこうではありませんか。今日は最後にともにおられる神様の約束を、みことばから三つ確認して終わりたいと思います。

主はヤコブに言われました。「見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこに行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたをすてない。」創世記２８章１５節

イエス様は聖霊なる神についてこう言われます。「そしてわたしが父にお願いすると、父はもう一人の助け主をお与えくださり、その助け主がいつまでも、あなたがたとともにいるようにしてくださいます。」ヨハネの福音書１４章１６節

インマヌエルであられる主イエスが言われます。「イエスは近づいて来て、彼らにこう言われた。『わたしには天においても地においても、すべての権威が与えられています。ですから、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子としなさい。父、子、聖霊の名において彼らにバプテスマを授け、わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。』」マタイの福音書２８章１８節～２０節

お祈り

恵み深い天の父なる神様。今日はヤコブの旅立ちとヤコブの家族を見てまいりました。そこには神様の恵みと祝福を一身に受ける家族でありながらも、神の約束を信じ、信頼しきれない、家族の破れがありました。

しかし、そのような家庭で育ったヤコブに、自分自身の負い目ゆえに、逃げることになったヤコブに主は現れ、ともにおられることを約束して下さいました。そして、この神の愛の約束が、今イエス様の十字架と復活を通して、私たち神の家族にも与えられていることを感謝いたします。

どうぞ、この土浦めぐみ教会、神の家族の共同体が、一つのキリストの体として、共に泣き、共に笑い、共に神の言葉を頂きながら、三位一体の神を礼拝する一つの家族であり続けるようにしてください。このお祈りを愛する主イエス・キリストのお名前によってお祈りいたします。アーメン。